

## 学力調査としての標準テストの透明性に関する考察： カナダ・ノヴァスコシア州を対象に

### A Study About Transparency in the Standardized Test as Assessment: Focusing on Nova Scotia, Canada.

森 本 洋 介

Yosuke MORIMOTO

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻

Graduate School of Education, Hirosaki University, Program for Professional Development of Teachers

#### 要 旨

本稿では、ノヴァスコシア州の標準テストであるPLANSについて、透明性を軸にしながら、どのような特徴を有しているのかを、調査の実施過程、とりわけ採点セッションの具体的な進め方に着目して分析した。その際、文献調査とともに、ノヴァスコシア州政府の一部署である「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」のS氏に2021年12月14日午前9:30-10:30(日本時間)にオンライン会議システムを通じて行ったインタビューをデータとして用いた。結果として、ノヴァスコシア州政府の立場からすれば教師や子どもとの関係性を維持するために透明性を可能な限り確保しており、教師や子どもの立場からすれば、PLANSのロー・ステイクス性がPLANS参加への一定の理解につながっていることがわかった。

**キーワード：**標準テスト, 学力調査, カナダ・ノヴァスコシア州, ロー・ステイクス性, 透明性

#### 1. 課題設定

##### (1) 21世紀の学力テスト

学校教育において、教育を受ける人間が身に付けた能力・技能を一般的に「学力」と定義した場合、その「学力」が身に付いたか否か、また身に付いたのであればどの程度身に付いたのかを評価する視点には、「診断的評価：教育活動直後に行う評価」、「形成的評価：教育活動の過程で実施する評価」「総括的評価：教育活動の区切りに行う評価」の3つの視点が主に存在する(田中, 2005)。

これらの評価の視点で具体的にどのような学力を測定するのかという議論について、日本では戦前から議論されてきた。太平洋戦争後に焦点を当てると、広岡亮蔵や勝田守一、中内敏夫、梶田叡一、田中耕治などの教育方法学研究者によって連綿と受け継がれてきている(日本教育方法学会編, 2014)。これらの議論においては、大きく分けて「数値によって測定できる学力」と、「数値では評価が困難な学力」に整理することができよう。これら2つの分類は、「同じ指標で他

者と比較可能か否か」という観点で重要であると考えられる。すなわち、日本の文脈においては学校教育に競争の場を設けることで子どもを将来的に社会で活躍できる人材に育成することを目的に、「数値によって測定できる学力」を重視してきた歴史がある。数値による評価が説得力を持つということは、パフォーマンス評価などの「～が～のレベルでできている」のように達成度を記述語(descriptor)で示した評価の方が子どもにとって重要であるという認識がなされつつある現代においても、なお根強いと考えられる。その背景には、OECDが実施する国際学力調査であるPISA(Programme for International Student Assessment)の影響があると考えられる。

PISAは2000年に初めて実施され、その後2003年、2006年と3年おきに実施されてきた。2021年の実施に関しては、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、1年延期され、2022年に実施される予定になっているが、実施を続けることには変わらない。また回を追うごとに参加国・地域が増えてきた。PISAが行われる

ようになった背景としては、国際的に知識基盤型社会における教育の成果と影響に関する情報への関心が高まり、「キー・コンピテンシー（主要能力）」の特定と分析のためのコンセプトを各国で共有する必要性が求められていたことがある。グローバル化が進む世界において、国際的に共通する鍵となる力、すなわちキー・コンピテンシーを開発し、評価と指標の枠組みをつくることにあったのである（立田，2014）。ここで言われる「コンピテンシー（資質・能力）」とは、単なる知識や技能ではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応したり、未知の課題に対して自分なりに解決策を見出したりしようとする総合的な能力のことである。現時点で所有している知識・技能だけでなく、現時点でわからない未知の課題に対して、リソースを駆使（例えばネットで調べる、有識者にインタビューする、など）して課題を解決しようとする意欲・態度も能力として含まれる（松下佳代，2010）。

日本でも1956年から1966年にかけて、中学3年生を対象に全国中学校学力一斉調査が実施されていたが、日本教職員組合の反対運動や、1966年の旭川学テ事件裁判の第一審判決を受けるなどの影響で、2007年の全国学力・学習状況調査（以下、「全国学テ」と略す）が開始されるまで、全国レベルでの標準テストは実施されなかった。ここでいう「標準テスト」とは、「検査実施時の受験者に対する教示のやり方、問題項目の呈示法、解答法の指示、検査時間などの検査実施法、各項目に対する受験者の反応の採点法が厳密に規定されており、しかも受験者個人の結果は準拠集団の得点分布に基づいて作成された集団準拠に照らして得点が解釈できるように作成されているテスト」（田中，2005，185頁）のことである。日本では例えば上述の全国学テや、大学入学共通テスト（旧「大学入試センター試験」）、などが代表例である。

このような標準テストは何を目的として行われるのだろうか。全国学テの場合は、「義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る」こと、「学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる」こと、そして「そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する」ことの3つである<sup>(1)</sup>。また大学入学共通テストは「大学入学希望者を対象に、高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とする」<sup>(2)</sup>

とされている。

## （2）標準テストの持つ性格

このように、多額の費用をかけて準備を行い、試験日・時間を設定して一斉に実施される標準テストの目的にはそれなりの意義があるはずだが、テストの影響の度合いが主に2種類存在している。ギップス(Gipps, C. V.)によれば「テストや評価の結果が、生徒の将来の進路や学校の評価となる結果、社会全体の注目を浴びることになることをハイ・ステイクスという。（中略）これに対して、そのような社会的な関心と呼ばないテストや評価をロー・ステイクスという」（ギップス，2001，252頁）とされる。ギップスの定義に当てはめれば、日本の場合、大学入学共通テストは受験者のその後の人生を左右するようなハイ・ステイクスな性格を有しており、一方で全国学テはその結果が個人レベルで言えば進学や成績に直結することはなくロー・ステイクスである。しかしながら全国学テに関して言えば、都道府県別・政令指定市別に平均値が公表され、各自治体の教育政策にある程度影響を及ぼすとともに、国民の関心も高く、国家レベルでの教育政策にも関係する。また大阪府教育委員会が2015年4月10日に大阪府内の中学校3年生の全国学テの結果を内申書の基準作成に反映させることを決めたことに対して、文部科学省は疑義を呈した<sup>(3)</sup>。大阪府の方針は、事実上学テの結果が大阪府の中学生の高校進学に影響を及ぼすことを意味しているからであり、全国学テにハイ・ステイクスな性格を確実に帯びさせることとなる。佐藤はハイ・ステイクスとロー・ステイクスについて、ギップス（2001）を引用しながら、両者は相対的な関係にあり、「学力テストそのものによって影響力（ハイステイクス性）が変わるのではなく、むしろ学力テストが埋め込まれている文脈や構造によって影響力が変わることを意味している」（佐藤，2021，9頁）とする。また北野（2021）は、日本の全国学テが2021年時点において米国ほどのハイ・ステイクス性を持つものではないとしつつも、「近年では日本でもテスト結果の公開や利活用の仕方、目標値の設定など次第に米国型のハイステイクス・テストへと接近しつつある状況にある」（北野，2021，19頁）と述べている。つまり、標準テストの性格について理解するためには、当該テストを行っている国や自治体の文脈や状況について理解しながら、当該テストの内容や構造について分析し、その影響について考察することが必要となる。

標準テストは、実施目的は先述したように複数存在するものの、共通の根底としては受験者の受験時点で

の学力を評価する、という目的があると考えられる。そして評価した個人や集団の学力を、どのように、何のために活用するのか、という点で個別の標準テストの意味合いが異なってくるのである。

### (3) 本稿の目的と研究方法

筆者は、これまでカナダを対象に、オンタリオ州とアルバータ州の標準テストを対象に、そのテストの意味合いについて研究を行ってきた（森本, 2020; 森本, 2021）。両州の標準テストには、学力調査を目的とした、初等中等教育の途中段階で実施される基本的にはロー・ステイクスなテスト（assessment）と、中等教育の修了試験としての意味を有するハイ・ステイクスなテスト（examination）の2種類の標準テストが存在する。例えばオンタリオ州では中等教育修了試験として「オンタリオ州中等教育リテラシーテスト（OSSLT）」がある。筆者はほぼすべての子どもが受験するという意味で、子どもにとって大きな意味を持ち、かつ日本とカナダで比較可能な性格を持つ、前者の学力調査目的の標準テストに焦点を当てて研究を行ってきた。カナダは10の州と3の準州があり、それぞれの州で独自の教育政策を実施している（各州に教育省があるが、カナダ連邦政府としての教育省は存在しない）ため、調査研究では個別の州をより丁寧に扱う必要がある。

カナダ全土の学力テストの特徴に関する研究としては小川（2007）の先行研究がある。小川は、カナダ建国から2006年時点までの、カナダ10州の中等教育修了試験（examination）と一般学力調査（assessment）の実施状況を明らかにしたうえで、カナダにおける学力テストの目的が教育の果たすべき説明責任にあると特徴付けた。プリンス・エドワード・アイランド州を除く9つの州では調査目的 and/or 中等教育修了目的の学力テストが実施されており、準州は近隣の州に準じた学力テストを行っている場合が多い。小川の先行研究を基に、筆者は、日本と同様に学力調査を悉皆で行っているカナダの3つの州（オンタリオ州、アルバータ州、ノヴァスコシア州）を対象に、運営方法や情報公開のあり方などについて、当事者を対象にしたインタビューと、学力テストの管理運営に関する文献等から明らかにしようとしてきた。オンタリオ州とアルバータ州に関しては先述のように既に一定の成果報告を行っており、その中で「透明性」（transparency）という言葉がキーワードとして浮上した。

オンタリオ州とアルバータ州は、カナダ国内では人口や都市の規模において中核的な役割を果たす州であ

り、標準テストもそれなりの規模で行われている。本稿では、ノヴァスコシア州というカナダ国内では比較的小規模な州を対象とし、標準テスト政策においてどのような特徴があるのかを明らかにする。その際、「透明性」というキーワードを軸にして考察を行う。本稿の考察部で言及するが、カナダの標準テストにおける「透明性」とは単なる情報公開に留まらない。この「透明性」に対する考え方は、半ばブラックボックスと化している日本のテスト政策や教育行政にも示唆を与えるものであり、カナダの「透明性」に関する政策をそのまま日本で採用することは不可能であるが、日本の標準テスト運営方法を見直す1つの視点であることには間違いのないものと考えられる。

## 2. ノヴァスコシア州の教育制度と標準テスト

### (1) ノヴァスコシア州の概要

ノヴァスコシア州はカナダの東部に位置し（図1参照）、2016年の国勢調査のデータ<sup>(4)</sup>では、人口が923,598人（カナダの総人口は35,151,728人）で、そのうち英語を第一言語とする市民が879,465人、フランス語を第一言語とする市民が28,490人となっている。人口の点では、日本で言えば標準的な政令指定都市や和歌山県全体（2020年10月1日時点）と同規模である。またカナダの特徴である移民の人口について、ノヴァスコシア州は非移民が842,760人で約94%（カナダ全体では26,412,610人で約76%）となっており、非移民が大多数を占めている<sup>(5)</sup>。なお、移民の出身地の6割近くをアジアが占めており、1割ほどが南北アメリカ、2割ほどがヨーロッパとなっている。

カナダは多民族・多文化国家として知られているが、ノヴァスコシア州はカナダ全体から見ると相対的に移民が少なく、入植以後から住み続けている住民が多くを占めるとみることができよう。ただし、2011年から2016年までの移民数は11,785人であり、これまでの総計である55,675人のうち2割程度を占めている。ノヴァスコシア州では1991年から1995年までの移民数が3,540人であるが、以降の移民数は国勢調査年ごとに増加の一途をたどっている。後述する「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局（Student Assessment and Evaluation of the Department of Education and Early Childhood Development）」のS氏に行ったインタビューにおいて、S氏がノヴァスコシア州の積極的な移民誘致について述べているのだが、統計的にもこの四半世紀における移民の増加が示されている。

人口規模でみればカナダのなかでも小規模であるが、15歳以上の人口の55%程度が高等教育を修了して

いる。カナダ全体と比較すると同程度の高等教育修了率であり、教育レベルとしてはカナダの平均的なレベルであるといえる。



図1 ノヴァスコシア州の位置

## (2) 教育制度

primary (幼稚部) から Grade 1-9 (初等～前期中等教育) までと、3年間の High School (後期中等教育) で構成されており、満5歳の子どもから学校教育を受ける権利がある。義務教育は満5歳から満15歳までで、基本的には公立学校に通うことになるが、私立学校やホームスクーリングも可能である。なお、幼稚部に関しては義務ではない。検定教科書のように政府が公的に承認する教科書は存在せず、各教師が自分で教科書として使用する書籍や教材、ワークブックなどを選ぶ (The Halifax Regional School Board, The Nova Scotia Office of Immigration, and The Nova Scotia Department of Education, 2013, p. 19)。

大多数の子どもが所属する英語コースの初等・前期中等教育のカリキュラムは以下の通りとなっている。

- 英語 (全学年) • 算数 (全学年) • 社会科 (全学年)
- 理科 (全学年) • 音楽 (p-6 学年) • 体育 (全学年)
- 健康 (p-6 学年) • 健康な生活 (7-9 学年)
- ミクマク語 (4-9 学年) • フランス語 (4-9 学年)
- 視覚芸術 (p-6 学年) • バンド楽器 (7-9 学年)
- フランス語 (7-9 学年)
- ゲール語 (Gaelic 3-9 学年)
- シティズンシップ (9 学年) • 技術 (7-9 学年)
- 布地芸術とデザイン (7 学年)
- 食物と栄養 (8 学年)
- 子ども学 (9 学年)
- 音楽の探究 (explore music 7-9 学年)

2021-2022年度からカリキュラム改革が進行中であ

り、2021-2022年度はパイロット校のみで新カリキュラムを実施している。2022-2023年度からすべての学校で新カリキュラムに移行する。このカリキュラム改革は主に各科目の内容をコンピテンシーベースに変更するものであり、教科や科目構成自体に変化はない。

授業期間は9月1日から翌年6月30日までの間で合計195日の授業日を設けることになっている。学校に通う子どもはノヴァスコシア州が独自に行う学力調査、修了試験と、カナダ連邦が3年に一度実施する学力調査 (Pan-Canadian-Assessment-Program: PCAP), PISA や PIRLS のような国際学力調査に参加することになっているが、PCAP や国際学力調査は抽出調査であるためすべての子どもが参加するわけではない<sup>(6)</sup>。一方でノヴァスコシア州が独自に行う学力調査である The Program of Learning Assessment for Nova Scotia (PLANS) は全員が参加する悉皆調査となっている。また後期中等教育を修了するための1つの条件になっている Nova Scotia Examination は High School に通うすべての生徒が受けることになる。

## (3) 標準テストの概要

ノヴァスコシア州が実施する標準テストであり学力調査である PLANS はノヴァスコシア州教育省に設置されている「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」のスタッフによって運営されている。当局の目的は

- 英語とフランス語での州、連邦政府の学力調査、国際学力調査の運営。
- カリキュラムの効果を測定するための調査プログラムの開発と実施。
- 子どもの学びを支援するための子どもに関する調査の開発と実施。
- 子どもの学力調査の結果を政府に提供し、教育政策に活用させる。
- 教師が調査の目的やその実施について理解できるように支援する。
- すべての調査や試験に関するアカウントビリティ達成のための報告書を作成し、教師と一般市民に対して周知する。

である<sup>(7)</sup>とされ、日本で言えば国立教育政策研究所に相当する政府の一部局であると考えられる。

繰り返しになるが、PLANSには学力調査である Nova Scotia Assessments と、後期中等教育修了試験にあたる Nova Scotia Examination がある。本稿では学力調査を研究対象にしているため、Nova Scotia Assessments のみを取り上げる。Nova Scotia

Assessmentsには第3学年で受けるリテラシーと算数調査(LM3)、第6学年で受ける読解、ライティング、算数調査(RWM6)、第8学年で受ける読解、ライティング、数学調査(RWM8)の3種類がある。これ以降、本稿でPLANSの名称を用いる際は、Nova Scotia Assessmentsを指すこととする。これらの設問やサンプル問題は一部しか公開されていないが、教師にはノヴァスコシア州が設けているGNSPESというシステムを通して公開されている。図2は公開されている、第3学年のリテラシーのサンプル問題である。

**Luke's Kite**

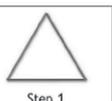
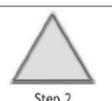
One day Luke saw Tina flying her kite. She was smiling as the wind blew her hair all around. The kite was really high in the sky and holding steady in the wind. Luke wanted to figure out how to make a kite for himself.



First, Luke looked at Tina's kite. Then he made a picture list of what he needed.

 Tissue Paper	 Scissors	 String
 Glue	 3 thin sticks	 2 pieces of ribbon

Here's how Luke put his kite together.

 Step 1	 Step 2	 Step 3
---	---	---

Step 1 and step 2 were easy, but he needed Tina's help to put on the anchor strings. (The anchor strings attach the longest string to the kite.)

When the kite was finished, Luke held it up high and started to run. The kite went up, but then it started to spin and it came falling down. Luke knew he had a problem. He looked at Tina's kite again and noticed something right away.

Luke glued the ribbons on his kite. This time, the kite went up and up and up... and it flew high and steady in the sky. As he watched his kite stay high up in the air, Luke realized that the ribbons have an important job. Their job is to help balance the kite when it is flying high in the sky.

図2 リテラシーのサンプル問題

図2のリテラシーのサンプル問題に関して言えば、連続型と非連続型のテキストを読み、「ルークにとって難しい作業はステップ1～3のどれですか?」という設問がある。この設問は選択式であるが、他の設問では短文及び長文記述の設問もある。文章記述の設問に対しては、レベル1～レベル4のルーブリックが設定されており、解答がどのレベルに当てはまるのかが評価となる。紙幅のため掲載しないが、算数の設問に関しても、選択式と記述形式の解答があり、読解やライティングと同様にレベル1～レベル4のルーブリックによって評価される。

なお第3・6・8学年のリテラシーやライティングの調査では、2つの長文記述の設問がある。1つは通常、フィクションのジャンルの問題で、もう1つはノ

ンフィクションのジャンル、例えば手紙や説明文といったものである。このようなリテラシーの設問の傾向はオンタリオ州とアルバータ州の学力調査にも同様の傾向が見て取れる。

学力調査の実施時期であるが、第3学年は5月に4日以上、第6学年は10月に4日以上、第8学年は5月から6月上旬にかけての間で4日以上の実施日を設けて実施することになっている。各学校はこれら実施日のなかで自由に選んで調査を行えばよいことになっている。「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」は、学力調査を午前中に実施することを推奨している。ノヴァスコシア州では一般に、学校が午前8時から9時の間に始まる。午前中の授業時数は3時間程度で、昼食後は2時間程度であるため、まとめて時間が取れる午前中を基本的な実施時間に行っていることである。また可能な限り多くの学校が実施条件をそろえて学力調査を実施することができるようにしているが、近年は各学校が柔軟に実施できるように体制を整えていると、後述する「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」のS氏は説明している。

学力調査は冊子に解答することになっており、回収された答案は「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」に送られ、スキャンしてデータとして取り込まれ、オンラインで採点者がダウンロードできるようになり、採点作業が行われる。採点後は「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」の担当者によって結果分析がなされ、解答者に対して個別に成績通知が送られる。子どもは成績通知を確認した後に不服申し立てを行うこともできる。なお、調査実施にあたって視覚障がいなどのある子どもは音声による問題伝達などの措置を講じてもらうことができる他、調査に参加することのできない、もしくは参加したくない子どもは正式に参加を拒否する権利がある。

以上が標準テストであるPLANSの概要であるが、PLANSを運営するうえで、運営者は透明性をどのように捉え、どのようにしてその透明性を確保しているのだろうか。以下ではPLANSの具体的な運営プロセスについて、「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」のS氏に2021年12月14日午前9:30-10:30(日本時間)にオンライン会議システムを通じて行ったインタビュー<sup>(8)</sup>の分析を主に用いながら説明しつつ、透明性に関する検討を行う。

### 3. PLANSの具体的な実施過程

#### (1) PLANSの一連の過程

PLANSの問題作成から調査の実施、結果の報告ま

表1 ノヴァスコシア州の学力調査開発モデル

1. 調査計画とタイムライン	1-1. 調査項目の開発：調査内容がカリキュラムと一致しているかどうかを確認する。	1-2. 調査問題の開発：設問が開発され、偏りや公平性に抵触していないかを精査する。	1-3. 実地テストのための準備：助言者集団が一体となって実地テストの準備を行う。
2. 実地テスト	2-1. 子どものサンプル抽出：ノヴァスコシア州全体から実地テストに参加する学校を選出する。	2-2. 実地テストの実施者を準備する：各教科の専門家である訓練された教師チームによって実地テストが実施される。	2-3. 実地テストを実施し、採点する：実地テストを実施し、教育省のガイドラインに従って採点する。
3. 改善	3-1. 調査問題の分析：実地テストの設問の結果を分析する。	3-2. 調査問題の改善：実地テストの設問の結果分析に基づき、設問や課題が改善されたり削除されたりする。	3-3. 調査問題の確定：学力調査の様式や支援のための書類を確定する。
4. 実施	4-1. 実施者の準備：インフォメーションガイドに基づき、サンプル問題やウェブサイトのリンクが、実施・採点・通知の情報とともに教師に提供される。	4-2. 学力調査の実施：教育省のガイドラインに基づいて、各調査が実施される。	4-3. 採点の実施：教育省の採点基準に基づいて調査の答案を採点する。
5. 報告	5-1. 技術・分析報告の準備：調査内容が検査され、各子どもの成績通知が教師・保護者に返却される。技術・分析報告が準備される。	5-2. 他の通知の準備：学校および学区レベルでの通知が出される。	5-3. 公立学校の内部部署へのフォローアップ：調査結果が指導計画と、州・学区・学校を基盤とした意思決定のための情報を提供する。

Nova Scotia Assessment Development Model. <https://plans.ednet.ns.ca/sites/default/files/documents/NSAssDev-Model%282014%29.pdf> 2022年1月8日アクセス, を基に筆者作成。

での流れについては表1のように情報公開されている。

本研究では、表1のモデルのうち「4-3. 採点の実施」(以下、「採点セッション」とする)に特に焦点を当てる。オンタリオ州とアルバータ州について筆者が以前行った研究から、これらの過程で誰が、どのような経緯で作業を行っているのかが、透明性のポイントになっていると分析したためである。

まず、PLANSの統括は先述したノヴァスコシア州教育省の内部局である「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」が行っているが、実際に表1の過程に関わっているのは、その大部分がノヴァスコシア州の一般教員である。「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」のホームページに「専門性を活かす機会 (Professional Opportunities)」というサイト<sup>(9)</sup>があり、教員はこのサイトにある情報や、登録サイトからPLANSの実施に係ることが可能である。教員が関わるのが可能なのは、問題作成と実地テスト後のレビュー、実地テストの実施、採点セッションへの参加、などである。なお、採点セッションに関わる教員の数不足の場合は、教育委員会や他の教育省管轄の機関の職員、また定年退職した教師や学生

(教員免許保持者ないし取得見込みの者に限る)も採用する、とS氏は述べている。

## (2) 採点セッションの概要

基本的な情報として、「専門性を活かす機会」には以下のような情報が掲示されている。

- ①週末の作業対価として、採点者には1日当たり195カナダドルが支払われる。
- ②週末の作業対価として、テーブルリーダー(各採点チームの監督者)には1日当たり220カナダドルが支払われる。
- ③学区・教育委員会の単位で組織される。
- ④GNSPESというオンラインシステムを通じて採点を行う。
- ⑤セッション開始前に教師には訓練教材がメールで送られる。
- ⑥セッションが始まる前に短い準備期間が設定される。
- ⑦セッションはオンラインで実施されるので、滞在場所や旅費は採点者に支払われない。
- ⑧作業の信頼性を確保するため、個室の作業場所を準

備すること。

- ⑨採点に参加する教師は所属学校長の許可が必要である。
- ⑩採点者やテーブルリーダーは以下を勘案して選出される：
  - ⑩- 1. 学区の代表。
  - ⑩- 2. 多様な背景や歴史的に周縁化された人々（アフリカ系、先住民であるミクマク族、障がい者、LGBTQ2+、ニューカマーのコミュニティ、など）。
  - ⑩- 3. 以前の採点作業に参加したことがあるかどうか。
  - ⑩- 4. 調査の該当学年もしくはその前後の学年を担当している教師が優先される。

オンラインで採点セッションを行うようになったのは2020-2021年度からであり、新型コロナウイルス感染拡大防止のためであるということがその理由である。S氏によれば、それ以前は採点会場を一ヶ所設けて、そこに採点者全員（150人程度）を集め、担当ごとにテーブルを分け、数日をかけて作業を行うということであった。2020-2021年度からは、Google社が提供するGNSPESというオンラインシステムをノヴァスコシア州政府が導入し、学習管理システム（LMS）として子どもの日常的な学習に用いたり、教師が校務に使用したりしている。採点セッションもGNSPES上で行うことができ、アカウントを所有している教師（事実上、ノヴァスコシア州で教職に就いている者）は所属校長等の許可さえ得られれば、全員が採点セッションに参加することが事実上可能である。PLANSの答えはすべて「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」に送付された後、スキャンしてPDF化され、データとしてGNSPES上にアップロードされる。S氏によれば、採点の場所はオンラインになったが、採点方法は従来と比べて大きな変化はないということである。1人のテーブルリーダーと呼ばれる採点グループの責任者と、8名の採点者を1組としたグループで採点を行う。なお、テーブルリーダーも採点作業を行うため、1グループあたり9名で採点を行うことになる。このグループ内で全員が同じ答案を採点し、互いに採点結果を突き合わせながらその妥当性について話し合い、必要があれば採点内容を修正し、作業を進めていく。上記のことから、採点セッションにおいてはいかにして的確な採点者を業務にあたらせるか、ということが重要になる。

### （3）採点者の訓練

S氏によれば、採点者の研修は数日にわたって行われる。まず研修では「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」の担当者から、採点者研修用のガイドを使いながら、PLANSで設定されたループリックについて説明がなされ、採点者全員がそのパフォーマンスレベルの項目の意味と、レベルの内容について正確に理解することになる。ループリックとは、「質の良し悪しを示す数段階程度の尺度（scale）と、それぞれの点数におけるパフォーマンスを説明する記述語（descriptors）」（西岡，2001，2頁）があることが条件となる。つまり、具体的な説明を伴った、いくつかのレベルを設定したものがループリックである。採点者はループリックの特徴（例えば同じ評価項目におけるレベルの記述において、共通したポイントがあること）などを理解することになる。

また実際に自分でPLANSの問題に解答し、自分たちでその解答を採点して、作業の方向性について話し合う。2日目も同様の研修を受ける。ある程度採点の方法が理解できてきたところで、特殊な事例についての採点を行うことになる。特殊な事例とは、例えば解答が英語かフランス語以外の言語で記載されていた場合、解答した子どもが何らかの事情を告発する（例えば、現在自分がいじめられている）ものであると受け取ることができる場合、などである。さらに「十分な証拠（Not Enough Evidence）」についての説明を受ける。これは子どもの解答に不備がある場合のことであり、解答がまったく読めないとか、単に書いているだけで、同じような文言を繰り返しているだけの解答のことである。このように、通常の解答パターンだけでなく、過去にあった解答例も織り込みながら、採点の基本的な方向性について採点者が理解を確実に行うのである。これにより、通常の答案であれば各自が個人作業で粛々と採点し、評価の分かれそうな解答に対しては複数人で話し合っって評価を決める、という効率と丁寧さを両立した採点作業を目指している。

採点者研修用のガイドでは、事務的に採点作業の方法について説明するだけでなく、採点セッションがなぜ重要なのか、学力調査から得られるデータがなぜ重要なのかについても説明されている。採点者はこのガイドを受け取り、研修の内容を復習するとともに、注釈なども読み込んで採点作業の理解を深めていく。テーブルリーダーはその後追加の研修を受けることになる。研修資料を使いながら、採点者をどのように統制していくのか、リーダーとしての知識を学ぶことに

なる。

#### (4) PLANSにおける透明性

ここまで、PLANSの一連の実施過程について、採点セッションに焦点を当てながら述べてきた。PLANSではなぜこのような方法を採用しているのだろうか。S氏によれば、学力調査を成立させるうえで重要なのは「関係性 (relationships)」であるという。S氏は「基本的に学力調査は同意によって成り立っています。もしすべての教師が実施を拒否すれば、私たちは調査を断念せざるをえません。そのための透明性の確保は重要です」と述べ、PLANSは政府だけでなく、少なくともノヴァスコシア州の教師から理解が得られなければ、調査自体が成り立たないことを説明している。その理解を得るためには透明性の確保が重要であるという認識である。

S氏は一方で「他の機関よりも、透明性が低い部分もあるでしょう。例えば、ノヴァスコシア州では学校ごとの調査結果を公開しません。調査結果の情報を学校とその地域には提供しますが、ウェブサイトには掲載しません。なぜなら学校はランク付けされることを嫌うからです。学校は、人々がテスト結果を見て、学校教育の質を判断してもらいたいとは思っていません。そのためウェブサイトでは公開しないのです」と述べている。つまり、あえて透明性を低くしている部分には、それなりの理由がある。調査結果の開示については、その代わりにテクニカルレポートを公表することで、ノヴァスコシア州全体の学力傾向を分析することになっている。これはオンタリオ州とアルバータ州も実施していることであるが、S氏によればノヴァスコシア州には両州ほどの分析のきめ細やかさや公表頻度には欠けるとし、今後改善すべき内容であるとしている。

ただし、S氏はPLANSの一連の過程(表1)には自信を持っている。S氏は「私たちはすべての段階において教師を参加させています。私たちは教師たちに学力調査の試験問題が教師たちによって作成されていることを知ってほしい。教師が採点していることを知ってほしい。教師たちとの関係性構築にとって非常に有益であるため、これらの事実を幅広く公開しています。

また、公正な学力調査の実施原則、公正であることを強く主張するため、できる限り情報をオープンにしています。調査内容に妥協せず、子どもが何に参加させられているのか、なぜ参加しないといけないのかを理解してもらえるようにしています」と述べ、子ども

との関係性についても透明性を確保することが重要であると述べている。

以上のように、S氏はPLANSにおける透明性において重要なのは「関係性」であるとし、ノヴァスコシア州と教師、そして子どもとの信頼構築がPLANSの円滑な実施に必要であるとする。PLANSに関係する人々を当事者として参加させ、可能な限り情報を開示して、なぜ学力調査を行うことが重要なのかを理解し、納得してもらえるように努力している。また、「専門性を活かす機会」<sup>⑩-2</sup>にあるように、先住民や、1990年代以降増加している移民の人々を可能な限り関らせようとしていることも特徴である。ノヴァスコシア州のカリキュラムにあるように、先住民の文化や言語について理解することが重要視されている。S氏は「倫理的にも政治的にも、そういった人たちの声を入れることは学力調査の開発にとって重要です。もし学力調査の内容が彼らの学習を代弁していなければ、子どもは学力調査に参加しようと思わなくなることを私たちは知っています。課題や文章、登場人物の名前、外見などに多様性を確保しようとしています。すべての子どもに、自分のことと学力調査の内容が関わっていることに気づいてほしいと思っています」と述べ、カリキュラムと学力調査を子どもにとって意味のあるものにするとともに、子どもがそれを実感できなければならないとしている。

#### 4. 考察

ここまで、ノヴァスコシア州で実施されている標準テストであるPLANSについて、その概要や採点セッションの内容、透明性のあり方について説明してきた。そして、なぜそのような透明性が確保されているのかについて、ノヴァスコシア州政府と教師、そして子どもたちとの「関係性」が根底にあることを理由として挙げた。透明性についての説明は政府側である「教育と就学前教育における子どもの調査と評価局」のS氏の発言を主な根拠にしてきたため、本項では、一般市民のPLANSに対する意識からPLANSの透明性について検討したい。

ノヴァスコシア州教育省が主催した一般市民への聞き取りでは、「学力調査と報告 (Assessment and Reporting)」の項目は、上位10項目には入ったが、9番目であった (Minister's Panel on Education, 2014)<sup>(10)</sup>。市民の意見の一部が掲載されているが、学力調査に関しては「標準テストは面倒で、時間とお金の無駄。子どもにとっても何の振り返りにもならない」という意見や、「小学校では教師が学力調査の点数向

上を強調しすぎて、子どもの社会的発達のような、小学校児童にとって大切な能力の育成に時間が取れていない」(学校の管理職)という意見があった。ただし学力調査に関しての市民の意見はこの程度であり、多くの意見は通知表の内容であるとか、ループリック評価が曖昧でわかりにくいとか、人種や民族が多様化しているからこそ評価指標を単純化すべきであるとか、評価の内容や方法に関する意見であった。このように、ノヴァスコシア州市民の意見としては、学力調査に問題があるというよりも、評価のあり方そのものに議論があるように考えられる。しかし、上述したある学校の管理職の意見のように、他の州や国で行われている学力調査と同様、PLANSでも点数向上の圧力を感じている教師がいることは気に留める必要がある。

PLANSに対して教員組合(Nova Scotia Teachers Union)はどのように考えているのだろうか。S氏は「私が14年間ノヴァスコシア州政府で働いてきた経験からいうと、教員組合が学力調査に大きな声で反対したことはありません。しかし、ときどき報道声明という形式で、学力調査は好ましくないという主張も行っています。しかしここ数年はそのような声明も出していません」と述べている。実際に2016年11月8日にカナダの公共放送であるCBCが掲載したニュースでは、当時の教員組合代表であるLiette Doucet氏の発言として、ノヴァスコシア州の教師は学力調査に対してあまり肯定的ではないが、調査自体をあまり気にしていない、むしろ日々接している子どもたちへの日常的な評価をより意味あるものとして活用してほしい、という内容を紹介している<sup>(11)</sup>。

このように一般市民や教師側からPLANSに対する批判があまり出ないのは、PLANSが極めてロー・ステイクスであることに起因すると考えられる。S氏も「私の見る限り、一般市民には学力調査に対してそこまで意識がないようです。オンタリオ州やアメリカ合衆国と比べて、学力調査が進級に関わらないことが、ノヴァスコシア州で否定的なトーンが出てこないこととの違いなのではないでしょうか」と分析している。ノヴァスコシア州政府は子どもたちに対してPLANSがロー・ステイクスなテストであること、すなわち学校の成績にはまったく影響しないことを説明しているとS氏は述べている。PLANSのロー・ステイクス性はPLANSの実施日程にも表れている。筆者がS氏に対して、「PLANSの実施日程が学校によって変わるの、テスト問題の漏洩につながるのではないかと聞いたところ、S氏は「情報漏洩に関してはあまり気にしていません。情報漏洩をさほど気にしていないのは、

学力調査がロー・ステイクスだからです。教師にとっても学力調査がロー・ステイクスであることは周知済です。カンニングをする同機はほとんどありません」と回答している。

ノヴァスコシア州でもオンタリオ州とアルバータ州と同様にハイ・ステイクス性、ロー・ステイクス性や透明性が意識されているのはどのような理由からであろうか。本稿1.(3)で述べた通り、カナダにおいては連邦政府としての教育省がないが、学力調査や修了試験は各州で何らかの形式で実施されている。Joint Advisory Committeeが1993年に発表した「カナダにおける教育のための公正な学力調査の実施に向けての原則」では、調査方法や結果の収集の方法、公表の仕方について、カナダ全州での方針が打ち出されており、各州はこのガイドラインを参考にしていると考えられる。

また2004年から2013年までオンタリオ州首相・教育相特別政策顧問に就任していたトロント大学オンタリオ教育研究所(Ontario Institute for Studies in Education of the University of Toronto: OISE/UT)のフラン(Fullan, M)は、マクロレベルの改革(州などの規模における自治体主導の改革)を「全制度の改革(Whole System Change: WSC)」と称して1997年から主張している。WSCは①意欲的な目標に挑戦し続ける、②説明責任を果たしながらも、モチベーションを保たせ、罰則を科さない、③結果への透明性とデータを効果的に用いた実践の改善、④データは教育実践の向上と社会への説明責任のためだけに用いる(ランク付けには用いない)、⑤教師の研修に力を注ぐ、⑥インフラを整備し、改革を進めるリーダーを支援する、⑦縦と横の継続的な協力関係を築く(Fullan, 2013, p. 27)、という要素を含んだものである。

以上のことから、1990年代半ばから学力調査をめぐってカナダ全土レベルでの議論が起こっていたことがわかる。特にフランの主張で述べられている要素②、③、④、⑤は、ノヴァスコシア州で実践されていることである。また、森本(2020, 2021)で述べられているように、オンタリオ州とアルバータ州でも程度の差はある程度存在するが、同様の要素を取り入れて学力調査が実施されている。各州でこれらのガイドラインや議論がどのように受け止められ、学力調査の実施に影響したのかは、より丁寧に資料を収集しなければならないところであるが、この論点に関しては今後の課題としたい。

本稿ではノヴァスコシア州の標準テストであるPLANSについて、透明性を軸にしながら、どのよう

な特徴を有しているのかを、調査の実施過程、とりわけ採点セッションの具体的な進め方に着目して分析した。結果として、ノヴァスコシア州政府の立場からすれば教師や子どもとの関係性を維持するために透明性を可能な限り確保しており、教師や子どもの立場からすれば、PLANSのロー・ステイクス性がPLANS参加への一定の理解につながっていることがわかった。教師や子どもからは透明性に対する言及が管見の限りでは見られない。このことは、一方では透明性に対する満足感が市民にあると捉えることができるが、他方では透明性が論点なのではなく、評価制度そのものにあると市民が考えていると捉えることもできる。

翻って日本の全国学テはどうであろうか。文部科学省は毎回の実施に関して問題作成の過程がどのようになっているのか、問題用紙の配布と答案の回収、採点などの委託業務を請け負った民間業者とどのような契約を交わしているのか、などといったことをホームページでは公開しておらず、全国学テの円滑な実施にあたっての留意事項や委託業務を落札した民間業者を公表しているに留まる。このような不透明な情報開示の一方で、結果に関しては詳細に伝えるため、本稿冒頭で述べたような調査結果の活用にばかり焦点が当たると考えられる。また、日本人はカナダのように問題作成の段階から結果通知までの一連の調査実施過程(表1)が学力調査であるという意識があまりなく、表1の「4. 実施」と「5. 報告」のみが学力調査であるという意識が強いのではないだろうか。既に日本でも外国籍の児童生徒に対する教育のあり方が議論されており、全国学テや大学入学共通テストに関しての公正さや公平性が今後議論の必要性を増してくる可能性がある。ノヴァスコシア州のようなカナダの標準テストにおける透明性の考え方を参考にする余地は大いにあると考えられる。

**謝辞** 本文は平成30-33(2018-2021)年度 日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究(B)「コンピテンシーを測るカナダの学力テストにおける採点プロセスに関する研究」(課題番号18K13045)の研究の成果の一部である。

## 注

- (1) 文部科学省ホームページ「全国学力・学習状況調査の概要」[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/1344101.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/1344101.htm) 2022年1月11日アクセス。
- (2) 文部科学省「大学入学共通テスト」検討・準備グルー

プ(平成30年度～)(第14回) 配付資料「参考資料2 大学入学共通テスト実施方針(平成29年7月)」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/091/gijiroku/1417523.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/091/gijiroku/1417523.htm) 2022年1月11日アクセス。

- (3) 日本経済新聞「大阪府教委、中3内申点に学テ活用を決定 全国初」2015年4月10日。
- (4) Census Profile, 2016 Census. Nova Scotia [Province] and Canada [Country]. <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2016/dp-pd/prof/details/page.cfm?Lang=E&Geo1=PR&Code1=12&Geo2=PR&Code2=01&SearchText=Canada&SearchType=Begins&SearchPR=01&B1=All&type=0> 2022年1月6日アクセス。
- (5) 移民の人口は25%のサンプルデータから計算している。
- (6) Going to School in Nova Scotia. <https://www.ednet.ns.ca/going-school-nova-scotia> 2022年1月8日アクセス。
- (7) About PLANS. <https://plans.ednet.ns.ca/about-plans> 2022年1月8日アクセス。
- (8) 質問項目は以下の通り。本稿のS氏の発言は、すべてこのインタビューに対する回答から引用している。
  1. Do teachers who offer to become scorer offer themselves or they need nomination by school board or principal?
  2. How do Teachers Federations in Nova Scotia consider scoring process that teachers participate? For example, in Ontario, Teachers Federations against scoring by teachers.
  3. How do you train scorers?
  4. Can people who are not teachers participate scoring process or not? If the number of scorers becomes insufficient, how do you supply it?
  5. How Nova Scotia ordinary people, guardians and students think about PLANS? Are they positive or negative about it?
  6. What is GNEPES? You say, it is the new scoring process. Is it computer-based testing?
  7. How did you score before COVID-19?
  8. Why do you administrate PLANS in the morning?
  9. Is there any inconvenience about the difference of test administration date? It is possible that someone leaks test contents to other schools that do not administrate it yet.
  10. How do you consider “transparency”?
  11. Why do you include LGBTQ2+ in testing development and scoring?
- (9) Professional Opportunities. <https://plans.ednet.ns.ca/professional-opportunities> 2022年1月8日アクセス。
- (10) 最も多かったのは「カリキュラムの実行(Curriculum Implementation)」で2539件、「学力調査と報告」は

724件だった。

- (11) CBC. *A look at student assessments and how they're used*. 2016/11/8 <https://www.cbc.ca/news/canada/nova-scotia/teacher-student-assessments-union-education-minister-tests-1.3842258> 2022年1月17日アクセス。

## 参考・引用文献

- Fullan, M. "The Return of Large-Scale Reform". *Journal of Educational Change*, vol. 1, 2000. pp.5-28.
- Fullan, M. "The New Pedagogy: Students and Teachers as Learning Partners". *Learning Landscapes*, vol. 6, no.2, 2013. pp.23-29.
- ギブズ・キャロライン・V著, 鈴木秀幸訳『新しい評価を求めて：テスト教育の終焉』論創社, 2001
- Hargreaves, A., and Fullan, M. "The Power of Professional Capital with An Investment in Collaboration, Teachers Become Nation Builders The Role of Career Stages". *JSD*, vol. 34, no.3, 2013. pp.36-39.
- Joint Advisory Committee. "Principles for Fair Student Assessment Practices for Education in Canada". In Jones, R. M., *Large-Scale Assessment Issues and Practices: An Introductory Handbook*. Lightning Source (Ingram) Books Inc. 2014. pp. 188-208.
- 北野秋男「第1章 『競争』と『評価』に向かう日本の学力テスト政策」佐藤仁・北野秋男編著『世界のテスト・ガバナンス—日本の学力テストの行く末を探る—』東信堂, 2021, 18-38頁
- 松下佳代「〈新しい能力〉概念と教育」松下佳代編著『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房, 2010年, 1-42頁
- Minister's Panel on Education. *Disrupting the Status Quo: Nova Scotians Demand a Better Future for Every Student Report of the Minister's Panel on Education*. 2014. <https://www.ednet.ns.ca/ministers-panel-education-disrupting-status-quo-nova-scotians-demand-better-future-every-student> 2022年1月14日アクセス
- 文部科学省「令和4年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」2021年12月21日, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/1411707\\_00009.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/1411707_00009.htm) 2022年1月17日アクセス
- 森本洋介「カナダ・アルバータ州における州統一テスト (PAT) の採点プロセスの検討」教育目標・評価学会第31回大会, 宮城教育大学 (オンライン), 2020年12月13日, 27-28頁
- 森本洋介「第6章 アメリカと似て非なる学力テストの様相—カナダ・オンタリオ州—」佐藤仁・北野秋男編著『世界のテスト・ガバナンス—日本の学力テストの行く末を探る—』東信堂, 2021, 118-143頁
- 西岡加名恵「ポートフォリオ評価法におけるルーブリックの位置づけ」『教育目標・評価学会紀要』第11号, 2001, 2-12頁
- 日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社, 2014
- 小川洋「学力調査にみるカナダ教育の特徴」『カナダ研究年報』第27号, 2007, 1-18頁
- 佐藤仁「序章 世界のテスト・ガバナンスを問う」佐藤仁・北野秋男編著『世界のテスト・ガバナンス—日本の学力テストの行く末を探る—』東信堂, 2021, 3-16頁
- 立田慶裕『キー・コンピテンシーの実践：学び続ける教師のために』明石書店, 2014
- 田中耕治編『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房, 2005
- The Halifax Regional School Board, The Nova Scotia Office of Immigration, and The Nova Scotia Department of Education. *Newcomers' Guide to Nova Scotia Schools*. 2013. <https://novascotiaimmigration.com/wp-content/uploads/2013/03/Newcomers-Guide.pdf> 2022年1月14日アクセス